

文芸

俳句

久方の日和すき込む春の畑
伊藤 敬子

開発の劈く音や年度末
今関満喜子

シャチが舞ふ鴨川の海風光る
魚地 照子

草ぐさにそれぞれ名のあり下萌ゆる
川島 通則

春泥の中に働く耕運機
向後 寛

起きぬけの視界くまなく新樹光
越川せつ子

競ひ合ふ三色スミレ背伸びする
小松 藤男

小諸なる詩想い出す霜解けり
佐瀬 輝夫

光ごと飲み干す春の水であり
椎名万里子

野良猫の尻振り歩く春の庭
市東富美江

湿めりたる地にももの芽光るなり
鈴木とし子

おしやれ着に一枚羽織る花曇
土屋美枝子

校章をきらり光らせ入学す
土屋 義昭

東風吹かば漁師泣かせの刻や来し
戸村 静華

名を呼べと追いかけてまわる恋の猫
内藤 くに

春炬燵片付けようかこのままか
早川 勇

春の雨生きとし生けるものになか
藤田 雅夫

短歌

初浸す桶の水面に波たちて
辛夷の影にほつと一息
越川 義則

桜老樹今年も生きて見らるるを
しばし頬寄せひかり見つむる
高梨 キヨ

娘と孫が墓石みがきくれたりて
夫の命日十年を迎ふ
鈴木まさ子

病持つ妹さそひ有馬の湯へ
行こうと弟電話をくれぬ
田崎 尚美

新しき赤い頭巾と前かけに
六地蔵様微笑みります
水須 俊

自転車に五十キロかかる道程を
妹夫婦は出かけて来たり
浅野 榮子

「携帯電話が読んでいます」と嫁の言ふ
榎の茂みに鶯鳴くを
押尾 輝子

金柑の甘露は見事な仕上がり
軽い気持ちに貰い来し吾
椎名美枝子

持ちゆきし波稜草のお返しと
ずしり重たきキヤベツをもらふ
青木 秀子

春彼岸み墓の前に頭ち来たり
もんべ姿に働く母の
芹川 初子

猫柳のふくらむ頃に会いたしと
言いたる友が病魔に逝きぬ
加瀬 弘子

六年生送り出したる学校を
包みて時がゆるく流るる
西山満里子

卵焼ふつくら色よく皿にあり
箸を付ける手しばし躊躇ふ
斉藤つね子



こうほう博物館 98

井戸枠の竹

この写真は平成十六年の発掘調査で出てきた、芝崎中島遺跡の中世井戸跡である。その井戸枠の造りはほぞ穴をあけた丸太を四隅に立て、その間に梁を渡し、その梁に竹を並べて立てかけ、周りの土砂の流入を防いでいる。発掘で出た時には少し崩れ、梁も外れ、上部は失われていた。このような竹を利用して井戸枠は中世井戸の特徴であり、東京の青砥葛西城跡でも出土している。

古代の井戸は、木を井桁に組んで枠を造っていたが、中世では井戸枠をより簡便に造ることににより、その労力を少なくしたのである。それを可能にしたのが竹である。竹は成長が早く、加工しやすく丈夫である。ここで使われていたのは、径3cm

程の中国原産の真竹で、中世の十四世紀ころにはかなり普及していたのだろう。しかし、竹は植物分類では草本で、遺跡から取り上げた竹を保存処理したが、原型を保っているのは、数本のみである。竹は中国では四君子の一つとされ、文人画によく描かれた。

(社会文化課 道澤 明)



▲芝崎中島遺跡出土の中世井戸

作品展

◎町民会館ミニギャラリー

5月 展示なし
6月 絵手紙ひかりの詩

◎文化会館ロビー展

5月 アートクレイクラフトクラブ
6月 アート押し花クラブ

◎銚子商工信用組合展

5月 展示なし
6月 展示なし

